

## 熱き夢追いの日々



**平田 正**  
協和発酵キリン  
名誉相談役

アメリカ留学から帰って2年後の1976年、管理職に昇進し、はじめて自分の研究テーマが持てるようになった。温めていたβ-ラクタム系抗生物質の新薬づくりに挑んだ。当時世界中の大手製薬会社がしのぎを削り、新薬開発で最大のドライブのかかった領域だ。

入社したばかりの若い研究員と助手の3人を引き連れて乗り込んだ。文字どおり一騎当千、大勢が行く道では勝ち目はない。そこで選んだ道は、全くの新規骨格づくりからの大挑戦。未踏のアプローチは競争こそ少ないが苦戦の連続。2年余りの悪戦苦闘の末、ようやく展開の見込める新骨格に辿り着き、大きなハードルを超えた。会社も一挙に10人を超える研究員を補強してくれた。



写真③ 1987年10月



写真①



写真② 1987年10月

写真①は、正月休みも返上し、年中無休で取り組んだ最盛期の研究仲間、戦友である(前列中央筆者)。皆、表情も引き締まっていた。後日役員、部長として会社を支える精鋭たちである。写真②は、ニューヨークの国際会議で研究成果を発表、大きな注目を浴び新聞記者の取材に思わず胸を張る。抗生物質の最大手Eli Lilly社が、自社研究からのパイプラインを差し置いて、我々の研究を開発候補に選んでくれた。嬉しかった。強力な開発力で速やかに上市、広く世界で処方される新薬が世に出た。青春をかけた十年来の夢が叶った。写真③は、技術導出の契約が成って、懇親ゴルフ会の前夜祭パーティーでの記念写真(前列右端筆者)。著名なβ-ラクタム研究者、有能なプロジェクトマネージャーたちの顔も懐かしい。翌日のハンディを決めるため申告し合ったところ、相手は全員80台、当方は一人を除き100を切れない下手ぞろい。明日はどうなることやらとベッドに入ったが、翌朝はコースにうっすら雪が積もっていてプレーは中止、恥をかかずに済んだ。